

情念と身体：17世紀西欧の記号空間*

遠 藤 知 巳**

1・情念の体制

初期近代、すなわちデカルト、ホッブスを生みだしロックへと至る17世紀中葉から末にかけての西欧社会において、情念（*passion*）がある特異な負荷を帯びた言葉であったことはよく知られている。デカルトは『情念論』（1649）を著しているし、『リヴァイアサン』（1651）を頂点とするホッブスの一連の著作群においても、人間個体の内部に働く情念の規則の把握は、社会＝共同体の自然学的解剖の開始点に位置づけられている。

20世紀末のわれわれにとって、情念（あるいは激情）とは、ある意味ですでに社会化されている感情／情動（*emotion*）の範囲内に収まりきれない身体反応の激発、社会の端的な外部として出現する動物的衝動であろう。あるいはそれは「情熱」として、特定の領域（たとえば、恋愛）のなかに囲い込まれる。だが言うまでもなく、情念／激情／情熱のこうした「外部」性は、「感情」という社会的カテゴリーが成立している空間の内部で得られる像にすぎない。個体の内側に留まる「心理的」実体でありながら、ときにコミュニケーションの賭金にされる感情／情動の領域が言説化されはじめるには19世紀を俟たなくてはならないし、その以前には、18世紀近代の感情／情操＝意見（*feeling/sentiment*）の分厚い層が堆積している。歴史をさらに遡ると、情念しか語らない、あるいは情念を中心として人間主体の内部と外部の関係語りきろうとした、17世紀の苛烈な空間が広がっているのである。

とはいえ、三世紀にわたるこれらの語彙の大規模かつ複層的な歴史的編成の過程を概観すること

は、この小論ではとても不可能である。感情の不在のなかで構想される、主体内部に生ずる情念という力の論理は、「身体」と「記号」の配列を巻き込むかたちで立ち上がってくる初期近代の中核に据えられている。その独特の魅惑を押し広げながら、この空間の苛烈さの構造を素描してみること、それが本稿の主題である。

2・情念と「心理」

情念の概念自体は、もちろん、古典古代の *pathōs/passio* に遡る。基本的には、17世紀までの情念の理論は、*pathōs/passio* を、唯一の創造神の存在を前提とするキリスト教の世界観のうえに焼き直したものだ。そのなかでもトマス・アクィナスの『神学大全』が、もっとも体系的であり、かつ大きな影響力をもった。もともと *pathōs/passio* は、人間に憑依し、彼をそれに対して受動的（*passive*）たらしめる外部的な力と想定された、「心理」ではないにしても人間に相関する作用という意味合いが強い（Dodds [1963: 185]）。スコラ哲学はそこに、世界の第一動因（*first mover*）としての創造主という概念をもちこむ。その結果、世界の内部で観察されるすべての運動（*motion*）は、同時に受動（*passion*）として把握され、人間の内部に働く感覚的情念＝感情（*adfectum/affection*）も外界の事物間に見出される運動も、一旦は同一平面上に置かれる。アクィナスは欲求＝動因（*appetite*）の概念を、人間の内部現象のみならず、自然界の事物のあいだに働くと想定された誘引力や反発力にも適用している。彼はそのうえで、事物の運動と同型の作用を、人間の内部に見出していく¹⁾。このようなかたち

*キーワード：17世紀近代、内界／外界の分節、記号空間

**日本女子大学人間社会学部専任講師

で、人間の内部空間の秩序と外界の事物の秩序とのあいだに循環が形成され、世界内のすべての存在者が第一動因から与えられた自己の傾性にしたがって運動=受動の階梯を構成する。これがアクィナスのいう「自然法」だった。

17世紀においても、この定義は欲求/情念概念の基礎に置かれている。たとえばベーコンが事物の「普遍的情念」を語ることができたのも、このような文脈においてである(Stillman [1995: 89] 参照)。だがそのなかから、人間の内部に属する情念の領域が次第に切り出されてくる。情念を論じた17世紀の理論家たちが、逍遙学派やエピクロス派、ストア派に対する(しばしば否定的な)かたちであれ)鋭敏な関心を示しているのも、アリストテレスを媒介にした運動=受動概念のスコラ哲学的な平板化には回収しきれないかたちで、精神(mind)の属性としての情念への注目がせりあがってくる証左と考えることができる²⁾。

このことはしばしば、「17世紀における情念の心理化」といった文脈で語られる。けれども、だからといって17世紀の情念が、われわれにとっての「感情」と等しいわけではない。デカルトの『情念論』を分析しながらジョン・サットンが述べているように、「こうした『前近代的』システムを現在から再構成するのが困難である理由の一つは、あらゆる心理学的状態(恐怖、憎悪あるいは喜び、そしてまた記憶、イメージ、信念などが、生理学的状態と密接に結びつけられ、制限され、またそれと同一視されていた)からである。「愛、驚異、夢、欲望そして記憶はすべて、身体をなかに流れ、また身体と世界とのあいだに成立する、精气や流体、体液のより大きな循環と運動していた」(Gaukroger (ed.) [1998: 116-117])。だから「情念の心理化」というよりも、むしろ内界と外界の存在的境位のちがいを明確に語ろうとする運動が生じ始めていると表現した方がよいのか

もしれない。その「内界」が、われわれのいう「心理」と同一である保証はどこにもない。おそらく、「感情」や「心理」という把握自体、内界と外界の関係に対するある特定の形式を前提としている³⁾。「愛」や「恐怖」の語彙で語られているものが、われわれのそれとかなり似た指示対象をしばしばもちながら、なおかつそれを「心理的状态」や「感情」と呼ぶことをためらわせるのも、内界と外界の関係づけの差異によるように見えるのである。

3・身体の逆立的把握

けれども、この関係づけ形式を特定することは、じつはきわめて困難である。われわれにとっての「身体」なり「外部対象」が、すでにある特定の内/外の関係づけ形式の別名であるからだ。サットンの行ったような留保すら、厳密には十分ではない。17世紀の情念が「身体」や「外部対象」に相関しているとしても——じっさい、相関しているのだが——、たとえば「身体」の外延自体が、われわれの視点からはどこかぶれる。多層的なかたちで身体と対象の水準を切り出し、折り重ねながら、内界と外界とが切り分けられていく——。17世紀の情念は、そんな空間を横断する言葉だったのだが、むしろ、この多層的な切断や折り重ねの総体が、「身体」や「対象」と呼ばれたというべきなのかもしれない。

17世紀の情念の言説にしばしば認められるのは、身体領域と魂領域との逆立的関係をおそらく明晰に把握する視線である。英国国教会の選良であり優れた古典学者でもあったエドワード・レイノルズの『魂の情念と能力とに関する論考』(1647)によれば、「人間の魂にはそれ自身を考えたとき、そしてまた人々の魂を比較したとき、二種類の欠陥が見出せる。魂のはたらきのもつ不完

1) アクィナスは魂の能力を植物的/可感的(動物的)/理性的に三区区分し、情念を可感的運動のもとに分類している。情念は好色的情念(concupiscible passion)と憤怒的情念(irascible passion)とに大別され、前者は対象に対する接近あるいは遠ざかりの運動、後者は好色的情念の達成の妨げになるものに対する運動として定義される。前者には愛/憎しみ、欲望/嫌悪、喜び/悲しみの3つのペアが属し、後者には希望/絶望、恐怖/勇気、そして対応物をもたない怒りが含まれる。このように彼は情念を11個に分類している。

2) この点に関してはKroll [1991]、Barbour [1998]を参照。

3) じっさい、心理/学(psychology)という用語が用いられはじめるのは18世紀半ばであり、学としての制度化はさらに遅れる。

全性と不平等性である。このうち前者に関しては、魂がともかくも圧迫を受けるあの身体という弱点に帰するつもりはない。[樂園失墜以来]魂の能力それ自体に内在する暗さを認めないことになってしまうからである。……だが人間の理解力のはたらきの不平等性と差異は……多くの部分が、身体の道具としての能力に見出せる相違、さまざまな気質や傾向から生じている」。それゆえ、

人間の魂の感覚知覚の仕組み(apprehension)におけるこの弱さは、魂そのものに帰属する直接的、本性的暗さだけに由来するのではなく、魂が身体と共生していることから由来するのであり、身体は[魂を]手助けし教化するには本性的に向いていない(Reynolds[(1647)→1996:12-13])。

ジャン・フランソワ・セノーも『情念の効用』(1671)のなかで同様の主張をしている。「魂を身体から分かち、身体がもたらすこれらの動揺を免除することは、人間の成り立ちを投げ捨ててしまうのと一緒である。[魂という]この気高い囚人が、理性をもたない被造物たち[=動物]の魂と同一の身体的機能に恩恵を被っているかぎり、彼女[=魂]は情念を享受することを強いられている。そしてまた、魂が自らののはたらきのなかで感覚を利用するかぎり、彼女は希望や恐怖を実践的な美德に用いることができるのである」(Senault [1671:4-5])。セノーの場合、「情念は魂の病であるという理由で……情念を除去することを主張したストア哲学」に対する批判の文脈のなかで語られているだけに、趣旨はより明解である。身体の領域は、魂に一定の攪乱作用を不可避的に与える不透明なものであり、情念は身体的な痙攣のごときものとして、こうした攪乱作用の結節点に出現する。にもかかわらず、身体性を除去することは、不可能であるばかりでなく馬鹿げている。魂と身体の共在性が人間の基本的条件だからである。

身体と魂、あるいは情念と理性のあいだに不可避の逆立的関係を見るような視線のもとで、身体は物体として明確な輪郭を与えられる。情念を対象に近づく／から遠ざかる運動として分類するこ

とは、アクィナスの体系がすでに行っているが、17世紀の情念の言説においては、身体が物体としての外延を与えられることで、対象への運動という論理は、世界自体の見え方と共振しながら、かつてない記述の具体性——それは結果として、一種の機械論的世界観へとずれ込んでいくことになる——を孕むようになる⁴⁾。このことはしかし、情念がそのうえで作動する精神=心の領域の囲い込みという事態と矛盾しない。身体/魂の領域が相互に逆立的なかたちで特定されることで、機械論と精神の領域とが貼り合わせになるからだ。ある意味では、初期近代の空間が情念にあれほどのこだわりを見せているのもまさにそのためであるとも言える。情念とは「魂が身体に生じさせ、身体から受け取る運動と印象=刻印」(Reynolds [(1647)→1996:28])である。つまりそれは、感覚を通じて身体が受け取った運動から生じる受動であると同時に、身体をある方向に動かしていく自己産出運動(self-motion)なのであり、その限りにおいて一種の擬似的な第一動因の位置を占めることになる。そのことで情念は、トマス主義的な「自然法」の論理から逸脱していく契機を孕む(レイノルズ自身がトマスの秩序観をかなり濃厚に引きずっているにもかかわらず)。外部対象と内界での運動とを対応づけることで、受動と運動とが分裂しはじめる。あるいは、そのようなかたちで内界と外界とが分節されていくと表現した方がよいかもしれない。物体としての身体および外部対象に対する機械論的解剖学と、特権的な「内部」としての精神の空間とが両立する世界のなかにあって、情念は蝶番の位置を占めるものだった。

4・情念記号の文法学

情念を語る空間においては、人間の「心理」は以下のような文体で語られる。

埋葬室の入り口から入ったとき、彼の目はただちに、墓所の向こうから差し込む小さな弱い光によって迎えられた。これを眼にしたとき、彼は突然の恐怖に襲われて驚愕したが、その恐怖が収ま

4) エピクロス派、ことにルクレティウスの原子論が、この文脈で注目されるようになる。

るにつれ（すべての恐ろしい対象物は、目に映る最初の瞬間にもっとも大きい「恐怖を与える」から）、彼の好奇心がすぐに彼の恐怖に打ち勝ち、彼をますます近づけていき、ついに……彼は女の姿らしきものを目にした。喪服を着ているが、その喪服よりもはるかに嘆かわしげな顔つき、極度の悲しみに腕を組んだ姿勢、頭は、あたかも足下の柩に今にも崩れ落ちんばかりにうなだれるがまま。この奇態で陰鬱な光景を暫時当惑して立ちすくみ、これが単なる幽霊のはずはないと考えながら——亡霊や幽霊、人間の姿をした悪魔の話は、無知蒙昧な大衆を暗闇のなかでも正直にし、美德への愛のためだけに美德を追求しようとはせぬ彼らを悪徳から遠ざけるべく、支配者と僧侶どもが作り出した支配のためのポリティック・フュクショナルでつちあげにすぎないのだから——、彼は恐怖から来るあらゆる憂慮を打ち捨て、大胆にも蠟燭の方へと近づいていった (Charlton [1668→1975: 8-9])。

引用したウォルター・チャルトンの『エペソスの未亡人』は、地下埋葬室で夫の死を嘆く貞淑なエペソスの女性が、墓所の近くで磔刑にされた盗賊の死体が盗まれないように番をしていた兵士に誘惑されてしまうという、ペトロニウスの『サテュリコン』のなかで物語られる挿話 (Petronius [1961: 338-339]) を取りあげ、それを語り直し／改釈した風変わりな作品である。情念の規則に対する人間学的考察のなかに、ときおり奇妙に（未だ誕生していない）小説（あるいはむしろ、ゴシック・ロマンス）の萌芽のような文体が入り込むという点でも興味深い「テキスト」である⁵⁾。ここには、17世紀における情念の語り方が典型的なたちで現れている。その特徴を、以下の三点にまとめることができる。

a) 受動の主語化／主体の受動化：まず第一に、情念は基本的に、文の主語の位置を占めることによって人間をその目的語とする。これは、人間主体における受動的状態として表現される事態 (“He was surprised.” など)⁶⁾ よりもはるかにつよく、主体を従属の位置に置く。人が情念をもつと

いうよりもむしろ、情念が人をもつとでも言えそうな、一種の憑依の感覚が働いているのである。このことは、情念の論理と感情の論理の決定的な差異を示す。感情は、主体がもつ、あるいは少なくとも主体のなかに生起するものと想定されており、それゆえ感情語を主語とする文は、まれに用いられることがあるとしても気取った修辭的表現と見なされるだろう。

b) 要素の連続体的把握：情念は原則的に、外部対象を契機として生じ、身体の上にある影響を及ぼすことで、人を行動へと駆り立てる（「彼の目はただちに……光に迎えられ……突然の恐怖に襲われて驚愕した」、「彼の好奇心がすぐに彼の恐怖に打ち勝ち、彼をますます近づけてい[く]」）。そして対象—情念—身体への影響—行為の生起の各要素は、原則的に、順序正しく一連の連続体を構成する。だがこの精神の内部空間化あるいは内界と外界との分節は、内／外の双方向に向かって破れかねないようなある過剰さを抱え込んでいる。情念は外部対象による印象がないと生起しない（それゆえ、主体の内部で完結する19世紀以降の「純粹感情」のごときものを、この時代はもつことができない）。だが同時に、この「機械論的」把握は、外部対象に対応しない幻像 (phantasm/fancy) の領域（「亡霊や幽霊、人間の姿をした悪魔」）を、まさに対応の失敗というかたちで執拗に回帰させる。1604年に出版されたトマス・ライトの『魂の情念一般について』の直截な構図にしたがうならば、情念は「理性と感覚の中間地点」である「想像力 (= 幻像 [を生み出す作用])」とほとんど交換可能なのである (Wright [1604→1971])。17世紀の情念は、外部対象との直示的対応関係によって成立する心の表象の領域と、対応づけの失敗がもたらす反表象の両者とが一連なりになってしまうある単一の平面上を動く。部分部分は外部対象に対応しているが、全体としては何物をも指し示さないキマイラの形象が、対象との直示的対応関係のはてしのない伸び広がりのもとに全てを包含しようとした17世紀の想像力の理論の中核に据えられたのも当然といえよう。

5) 本当は、この時期の資料体を「テキスト」と見なせるかどうか自体、大きな問題を孕んでいる。この点に関しては、遠藤 [1997]、[1999a]を参照されたい。

6) 18世紀以降になると、こうした受動態は、より状態的に把握されることで感情の語彙へと読み替えられていく。

c) 情念の継起的性質：情念は一定の輪郭を帯びたかたちで予め分節されている。情念のカテゴリ一表の改変がつねに問題となるのもそのためだ。したがって、ある未分化の原初的身體反応あるいは「感情」の端緒が情念へと結晶していくのではなく、情念はいわばはじめから情念なのである⁷⁾。社会的感情と身体的激情の分節の端点に情動 (affect) を設定する20世紀的論理はここにはない。ところが同時に、一つの情念は、それ自体で完結するよりもはるかにしばしば、近接する情念と接触し、継起していくことでそのかたちを変えていく（「驚愕……恐怖……好奇心……大胆さ [= 勇気]」）。情念の継起的変容可能性というこの想定が、17世紀の情念論の多くをして、理性（意志）による情念の一方的禁圧ではないやり方で情念のかたちを変形し、複数の情念を相殺する、さまざまな方策を考案することを可能たらしめているのである⁸⁾。

このようにして情念は、身体作用であると同時に心に生起する記号となる。あるいは、ある変容可能性をもった記号^{キヤラクター}として、身体作用が心のなかに刻印されているのである。ほとんど自動的に進行する情念の変容過程の速度をわずかに早めたり遅らせたりすること、あるいはその方向を少し変えてやること。「情念の制御」という概念によって彼らが名指そうとしているのは、そうしたもののなかもしれない。そのことで切り開かれる、現在から見ればいかにも消極的な自由度のなかで、心に生じた情念に対して心自身が抱きうる関与あるいは留保の作用が語られる（「これは単なる幽霊のはずがないと考えながら……恐怖から来るあらゆる憂慮を打ち捨て」）。もっとも、17世紀の情念の言説が切り開きはじめて「心」の実定性は、われわれの「心理」のごとく、個々の情動や

感情を収容し、それらに先行して存在している精神の広大なフィールドではなく、むしろ「記号」の「刻印」という語り方を可能にしているもの、あるいはそうした語り方そのものとして成立しているとでもいうほかのない何かなのだが¹⁰⁾。

5・魂の政治体

それ自体としての固さを有する個々の自存的記号が、にもかかわらず、何らかの規則のもとで、別の記号へと変移あるいは変容する。けれどもこれは、われわれから見るとかなり不思議な「記号」である。自存的な存在がなぜ変容しうるのであるのか？ 多くの論者が、複数の情念の背後にある単一の基底的情念を想定することで、この変容可能性を説明しようとしている。基底のとされる情念はさまざまだ。『エペソスの未亡人』は、愛と肉欲は同じ「欲求」の別名にすぎないことを証明しようとするものだし (Charlton [ibid. : 50-69])、アウグスティヌス主義を謳うセノーによれば、すべての情念は——憎悪までもが——「愛」の変異体である (Senault [op. cit.])。このような構図は、本来は単一のものである情念に複数の名称があるのはなぜかという難問を呼び込むことになるはずである。もちろん、17世紀の情念理論は、この問題には直接答えることができず、それゆえ、対象に対する接近／離脱の幾何学的力学に向かってつねに行きすぎる。にもかかわらず、潜在的に単一であるはずの情念の複数の現象態を語ってしまうところに、身体性とほとんど同型的に発見される「記号」の姿が浮上してくる。

このことは、情念の制御や善用という17世紀のプログラムにも関係してくる。情念の単一性の想定が、実質的な名称の複数性に向かって破れてしまう空間にあっては、「制御」であれ「善用」で

7) 彼らが最大の典拠にしていたセネカのなかには、むしろそうした感情の端緒が語られている (Seneca [1958 : 148-151] など)。17世紀の情念の言説も「原初的情念 (propassion)」を語ることがあるが、それをむしろ人間的条件の外部に置こうとする。キリストのみにそうした原初的情念の維持が可能であるとしたセノーの議論 (Senault [op. cit. : 46-53]) が一つの典型である。

8) 「危険な情念」の社会的総和が混乱をもたらさないという、自由主義的社会観の誕生に向けて情念の概念史を整理したハーシュマンの議論 (Hirschman [1977=1985]) は、あまりに予定調和的である。

9) 18世紀初頭になると、情念を過度の感情の「修辞」と等值的に読み替えることで、語られたこと全体に対する「感情的反応」の領域が確保されていくようになる。この過程については別の機会に論じたい。Dennis [1704→1971]、Kames [1762→1993]などを参照。

10) 17世紀半ばから18世紀初頭にかけての心=反省の言説編成は、別に詳しく論じた。遠藤 [1999a]。

あれ、情念に対抗する原理も、きれいに単一的な姿を結ばない。3節で述べたように、情念と理性とのあいだには基底的な逆立の関係が想定されているのだが、制御／善用の対象である情念が事実的複数性を帯びるのに応じて、制御の主体である理性も、その超越的地位にある種の制限が付されてしまう。反省する精神が心の全域を見渡すという、いわゆるデカルト主義的二元論、あるいはフーコーが「先験的＝経験的二重体」と定式化したあの19世紀的な反省主体は、じつはこの空間においてはなかなか構成されない。

ライト、レイノルズ、セノーらが一致して述べているように、身体は理性の臣下 (subject) ではなくむしろ単なる道具 (instrument) にすぎない (Wright [op. cit. : 8]、Reynolds[op. cit. : 39-40]、Senault[op. cit. : 13])。物体 (material body) としての身体 (corporeal body) は、魂に生体としての限界を与えるが、それ自体は中立的なのである。その身体＝物体の内部で、理性と感覚あるいは情念とが主人／臣下の関係に入る。だがこの主人は、常に臣下たちと駆け引き関係に入る存在である。この点に関しては、セノーがとくに雄弁に語っている。

たしかに [情念という] 運動あるいは攪乱 (agitation) は……彼女 [=魂] を奉戴してはいるが、彼ら情念はある種の自由を主張することを慎みはしない。情念は彼女の奴隷というよりも市民なのであって、魂は彼らの統治者であるというよりは審判者である。感覚から生じるこれらの情念は、つねに自分たちを弁護する。想像力が知性に情念を引き合わせるときにはいつも、彼は情念どものために一席弁ずる。このような強力な弁護人によって、情念は自分たちの主人である魂を墮落させ、すべての裁判に勝ってしまう。知性は彼らの主張に耳を傾け、その理の軽重を計り、彼らの性質を鑑みて、不満を与えないように、しばしば情念どもに有利な判決を下す。意志の首席官吏であるはずの知性が意志を裏切り、何も知らない女王をかついで真実をでっち上げ、彼女に虚偽の報告を吹き込み、正しくない命令を引きだそうとするのである…… (Senault [ibid. : 15-16])。

絶対王政の政治空間に居住した17世紀人らしく、彼らはこうしたありように対して、「魂の政治体 (the body politick of the soule)」というまことに直截な用語を与えている。魂とは、あやしげな臣下どもがひしめきあう、虚偽と詐術に満ち満ちた宮廷空間なのだ。情念も理性も、きわめて具体的な身体＝物体性を帯びたものとしてイメージされており、それら複数の身体の連なりが、同時に「魂」という全体なのである。

6・切断される身体

こうした語り方は、身体／感覚に対する独特の唯物論的視線にもつながっている。たとえば『ディダスカロフォコス』(1680)において聾啞者の言語教育の方策を論じるジョージ・ダルガーノは、思考伝達の媒体は声のみではないこと、可視的な表徴を体系化し、その規則を教えることで、声の直接性から遠ざけられている聾啞者にも、言語の獲得／使用の道が開けていることを示そうとする。そうした代替言語の有用性を論証するために、彼はこのような「ドラマ」を語り始める。

盲目のホメロスが、機転が利くが口の利けないイソップという名の奴隷の噂を耳にする。イソップは前述のセマトロジー [=精神の思考を感覚可能な物質に転写する術] のあらゆる技法を身につけていたし、ダクティロロジー [=話者の指の動きによって意図を読みとる術] にも長けていたので、ホメロスはイソップを買うことにした。最初にイソップにさせたのは、書き込みだらけの『イリアッド』の原稿を清書させることだった。イソップにはホメロスの筆跡が良く読めなかったので、ホメロスはいつもそばにいて、イソップが字を間違えたときには指で [字を書いて] 直してやった…… (Dalgarno [1680→1971 : 129])。

ところが、あるときイソップが口ごもったのを、嘘を吐こうとしたと勘違いして、ホメロスは「突然激情に駆られて」、イソップの舌を切ってしまった。だが彼は自分の行いを後悔し、聾者のイソップでも耳は聞こえるし、グロソロジーに長けてもいたので、彼を手元に置きつづけた。ある時ホメ

ロスが友人を自宅に招き、イソップにとびきりの珍品料理を出すように言ったところ、イソップは切られた自分の舌を大皿に載せ、舌の代わりに笛を使って [=グロソロジー]、ご主人の字が読みにくくても私は原稿を破ったりしなかったのに、キヤラクターとってホメロスを非難した。非難に耐えられずホメロスがイソップの笛を火中に投じると、イソップは難を恐れて主人の足下に跪き、ハプトロジー [身体接触による伝達術] によって許しを乞うが、その手にはなぜか舌と笛が握られている。ホメロスの「怒りは恐怖と賞賛に変わり」、こいつは魔法使いにちがいないから殺してしまおうかと思う。だが再び気を変えて、明日もう一度友人を招待するから、今度は一番日をおいた赤身の肉を出すように命じた。ところが、次の日イソップはまたもや自分の切られた舌を皿に載せ、お言いつけ通りにしました、と言う。怒ったホメロスはついにイソップの眼を抉り取って、盲目の自分と同じ状況に落としてしまう。その後、老齢によりホメロスは聴覚を失い、それを契機にイソップと仲直りをする (コミュニケーションできる相手が他にいなくなるから)。彼らはよき友人として、指を用いて昔話をして暮らし、アルファベットで書かれた『イリアッド』の筆跡を、手でなぞって読むのだった ([ibid : 129-130])。

諸感覚器官を平然と切り取り、消去していくことで、もっとも基底的な感覚である触覚さえ最終的に残っていれば言語伝達が可能であることを「論証」してしまう……。身体／感覚、それらが生み出す印象／情念の複数性を前提としている空間にあっては、こうした部位の「切断」は、残酷でも何でもなかったのだろう。それにしても、典拠の不在に対する憤りややかな顧慮など一切欠いたかたちで平然と上演されるこの「主人」と「奴隷」の物語に、現代のわれわれは、身体／記号の17世紀的配列にまつわる過剰さを感じないではいられない。事実的な複数性が文字通りの身体的複数性を呼び込むがゆえに、キヤラクター記号 自体がある種の武骨な身体＝物体性を帯びてしまうのである。

7・17世紀観相学の地平

情念が自存的な記号であることは、情念が

キヤラクター記号となっている形象の総和として、精神の空間を描くという態度を生み出した。たとえば、感覚的情念 (sensitive passion) の領域は、アクィナス以来人間と動物の共通基盤なのだが、ここに新たな議論がもちこまれる。動物はその単純な生活によって、自らの本質であるその情念と完全に一致している。それゆえ、個々の動物／それと一致する情念は、より複雑な混合様態である人間の精神の一部分を表象するキヤラクターという意味で記号となる。「獣の生活は均質的であり、また自然は彼らに狭い活動範囲しか与えていないので、獣はごく少数の情念しかもっていない。彼らの活動のほとんど全ては、彼らに取り付く恐怖あるいは彼らが影響される欲求によって生じる。だが人間の生活ははるかに複雑であり、生活の営みにおいて千もの異なった不便を強いられるので、彼の情念は群れなして湧きおこる。どこに行こうが彼は怒りの、恐怖の、喜びの、そして悲しみの題材を見出す。人間の魂がさまざまな生物の身体へと入り込み、獣どもの悪しき性質を選りすぐり、蛇の狡猾さ、虎の憤怒、獅子の癩癩を一人で併せもっていると詩人たちが想像してきたのもそれゆえである。詩人はこの虚構によって、人間のみがすべての獣を全部合わせたのと同じだけの情念をもっていることを教えている」(Senault [op. cit : 84-85])。偽アリストテレス以来の動物観相学の伝統が、新たに賦活されたのも不思議ではないだろう。動物と人間の形相の類似と本質の共有とを無造作に結びつけていた従来の動物観相学が、新しい記号の理論と結びつく。たとえばジョン・イーヴリンの『ヌミスマータ』(1697) は、古銭学と動物観相学とを、記号の概念によって同一平面上に並べ、相互参照させようとした実例である (Evelyn [1697 : 292-342])。

動物観相学的な情念の分類は、キヤラクター記号を、それ以上還元不能な単純さという位相において精神の基盤部分に刻印されている「自然的」存在にする。たぶん、固いモノのようなこの「自然的記号」を背景とすることで、かかる原初的記号の余剰の領域が示唆されるのである。「セネカの言葉を信じるとすれば、動物のなかで生じるこうした運動は、感情 (affection) ではなく記号と印象キヤラクター＝インプレッション刻印である」(Reynolds[op. cit : 32])。17世紀人は、

この余剰の領域を直接には指差させない。「感情」の領域も、情念記号の組み合わせや展開としてしか語れないのだが、倦むことなく記号を組み合わせつつける営みの果てに、そうした余剰領域の出現を感じてしまう。

言い換えればこういうことだ。魂の側から身体＝物体を見たとき、精神＝身体複合体としての人間は、ある茫洋とした捉えがたさを帯びることになる。身体機械論の贅りのようなものとしてそこに生まれているのは、あまりの近接性もたらす暗さという、スコラ哲学のなかにはなかった感覚であるように思える。「われわれが通常、すぐれた物よりも新奇な物の探究に好奇の念を駆られ、価値ある事物が、近くにあるがゆえに軽視され、知られないでいることは、学識ある人々が正当にも不満を述べているところである。かくしてわれわれは子供のように、気まぐれな熱心さと不毛な好奇心をもって、自然というこの大いなる書物のページをめくり、創造者のもっとも偉大な力とその作品の卓越性が表れているごく通常の特^{キョウテツ}性＝記号を研究することがない」とレイノルズは語る。「彼自身との距離の近さによって、人間は彼自身にとって、もっとも知られておらず、無視されているからである。だが神が人間のなかに、神御自身のお姿に合わせて、より注目すべき特^{キョウテツ}性＝記号を刻印し、人間を神の創造物のなかで被造物の卓越性を示すもっとも完璧な事例とされることを喜ばれたのを考えれば、われわれは人間を、自然[という書物の]の大いなる多様性における、もっとも小さくはあれどももっともすばらしい一巻と考えざるをえない」と(Reynolds [ibid. : 9-10])。身体の唯物論のただなかで、自己の自己に対する反省の営みが有しているある限界の存在が暗示されはじめる。おそらく、物質性に何度もかき消されながら、そういうかたちで「心」の領域が生まれ始めているのだ。

あるいは、そのような「記号」が生じつつあるといってもよい。情念記号の読解という主題系が、おぼつかない姿を現し始める。17世紀の情念の言説のなかで「観相学／者(physiognomicks / physiognomer)」の形象が挿入されるのはこの地点においてである。前出の『エペソスの未亡人』は、その点でも興味深い事例を提供している。愛

する夫の死を嘆く貞淑な婦人が、兵士の誘惑にたちまち身を任せる変わり身の早さに、「神からの啓示によってしか分からない魂の本質の不可知性」を嘆いてみせながら(そのくせ、この心変わりを、まず勤められて食べ物を久しぶりに口に、次に気付けのワインを飲むことで生じた彼女の体液／気質の変化の効果として、きわめて唯物論的に解剖しているのだが)、チャールトンは変容の読解可能性を論じはじめる。

さて我々が未亡人に話を戻すと、この兵士が彼女を一目見たときよりも、自分が驚きと驚異を感じていることに私は気づくのである。どうやら私には、彼女のなかに、単なる気質の変化のみならず人格の完全な変容を表示するある種の徴候が認められるようだ。……彼女は今や嘆き悲しむ寡婦の姿をほとんどもたず、もし観相学者たちのごとく外見の表示記号(sign)から中身を占う自由を行使してもよいのなら、私は彼女をこの世でもっとも喜ばしい、幸せな花嫁だと考えるだろう。彼女の額は滑らかになっているのみならず、広がって優美に豊かになり、繊細で快活な明るい色に染まっているように見える。……彼女の唇は膨れ上がって見事な朱色となり、かすかに震えている。……一言でいえば、私は彼女のなかに、自然的で実体から不可分の記号(natural and inseparable characters)として大いなる喜びに固有のあらゆる表示記号の集合を見出すのである(Charlton [op. cit. : 29-30])。

気質の変化はきわめて具体的に身体そのものを変容させる。この変容の論理は、表示記号／自然的記号(sign/character)のあいだに微妙な距離をも生み出すのである。過去の物語を三人称で語りなおしていたテキストのなかに、かなり唐突に一人称の語り手が出現する。一人称がこの距離を律儀に担保しているが、しかし同時に、「観相学者」として振る舞う「私」の視線の唐突な出現とその荒唐無稽な無根拠ぶり(いかなる意味においても会うことのできない人物の顔を「目にしている」のだから)が、記号空間に開いたこの距離を、恣意性に向かって消去してしまうのである。

8・「記号学」の予兆：バルワー

こうした17世紀の記号空間の広がりを追尾しつづけた人に、ジョン・バルワーという風変わりな^{サヴァント}碩学がいる。バルワーは基本的に「自然的」な17世紀の身体＝記号の領域を、かなり自覚的に「記号」の論理として語ろうとしたという点で特異である。彼が当時それほど受け入れられなかったのもおそらくそのためだが、医学者でもあったバルワーは、医学のなかで用いられていた記号／徴候（sign/symptom）の概念を広く応用しながら、一種の身体言語の論理学／修辞学を構想しているといえる¹¹⁾。その意味では、記号概念をもとに観念の認識論を構築した後代の医者ジョン・ロックの先駆者たることに失敗してしまったような人物であるともいえるかもしれない。

「手の自然言語」を体系化しようとした『キロロギア』（1644）、「感情を表示する筋肉の解剖学」を目指した『バトミオトミア』（1649）、自然的身体からの変異／畸型の自然誌的カタログである『アントロポメタモーフォシス』（1653）¹²⁾。詳しい分析は別の機会に譲らなければならないが、何よりも、これらの作品の並置の構造が興味深い。「発話と同じくらい雄弁な、手の自然言語」の文法規則を構造化しようとした『キロロギア』では、指し示す手の動きが、外部対象と情念／印象との直示的対応関係による内界と外界の分節という世界の見え方をなぞりなおすかのように象徴化される。だが同時に、手の伝達能力の過剰な読み込みとともに（彼は意味ある手の動きを169に分類し、かつ個々の動きにしばしば複数の意味を与えている）、手は身体から分断されるのである（Bulwer [1644→1974]）。『アントロポメタモーフォシスあるいは人間の変容』では、神の似姿である「自然な＝美しい身体」からの逸脱態として、さまざまな人類社会における「人工的＝不自然な」身体加工の習俗が蒐集されている。顔面は完全に身体の物理的部分として語られている。たとえばある部族は長い額を好むがゆえに赤ん坊の頃から頭部の両側に板を押し当てて圧迫し、また別の部族は寸

詰まりの顔に美を見いだすがゆえに木杵を上から縛りつけておく。非ヨーロッパ世界を中心としたこれらの習俗のちがいはすべて悪しき逸脱として処理されてしまうが、文明と野蛮の安定した二分法には至らない。ヨーロッパ世界においても「奇態に洒落のめした衣装や不自然な化粧」が跋扈している（Bulwer [1653：529-559]）。規範の定点であるはずの「正しい」身体は、どこにも指し示せないのである。

そして、おそらく世界最初の表情の解剖学の試みである『バトミオトミア』においては、意志より発する身体の自発的運動に感情／情念が還元される。運動は筋肉という身体的基盤によって可能となるが、同時に、個々の動きはそれ自体において直ちに意味をもつ、より正確には意味「である」。この両面を同型的に把握し、かつ意味に応じた名称を各筋肉機能に与えることが、バルワーの提唱する「^{モラル・アトミ}道徳的解剖学」だった。

あなたはこの本のなかに、頭部の時計細工、あるいは、われわれの外的運動すべての発条であり内的なからくり機構と私が呼ぶことにしているものを見いだすでしょう。これらが運動を生み出し、自然が人間に与えた感情〔情念の表出〕のダイアルを制御しているのです（Bulwer [1649：頁数記載なし]）。

バルワーの医学的視線は、身体の物質的把握というこの時代のモードのさらに外に彼を押しだす。そのことで、表示する記号の一覧を諸身体機能と真に同型的に把握しようとする強いドライブがかかる。執拗なカタログ作成の試みの複数性は、それが最終的に失敗していることを表しているように見える。だがこの失敗がかなり大規模な迂回路を経て回帰しているということが、彼の言説をより自覚的に「記号学」的にしている。そこに認められるのは、ロックの「記号学（doctrine of signs）」の、一種の失敗した予兆なのである。

9・結語

11) 医学における記号概念の適用過程については、Patey [1984：27-68]。

12) バルワーにはもう一冊、『フィロフォコスあるいは聾啞者の友』（1648）という著作があるが筆者は未見である。

情念は身体作用と同型的に重なりながら分節される。同時に、その組み合わせの向こう側を暗示しようとする盲目の運動に貫通されることで、情念は17世紀近代を特徴づける特権的な記号となっていた。記号の概念は、曖昧なかたちで解釈の実定性を引き寄せはじめる。だが、記号と解釈の循環は、ひとつの自律の平面を構成するというよりも、それ自身容易に変容しうる物体＝身体の平面に、繰り返し呑み込まれてしまう。17世紀の言説空間とは、この自律の失敗の反復自体が構成するある厚みであるというほかはない。

文 献

- Barbour, Reid, 1998, *English Epicures and Stoics: Ancient Legacies in Early Stuart Culture*, Univ. of Massachusetts Pr.
- Bulwer, John, 1644→1974, *Chirologia/Chironomia*, Southern Illinois Univ. Pr.
1649, *Pathomyotomia: Or a Dissection of the Significant Muscles of the Affections of the Minde*, Humphrey Moseley.
1653, *Anthropometamorphosis: Or the Artificial Changfelling*, William Hunt.
- Charlton, Walter, Guibbory, Achsa (intro.), 1668→1975, *The Ephesian Matron*, William Andrews Clark Memorial Library.
- Dalgarno, George, 1680→1971, *Didascalocophus: Or the Deaf and Dumb Mans Tutor*, in the Works of George Dalgarno, AMS Pr.
- Dennis, John, 1704→1971, *The Ground of Criticism in Poetry*, Scholar Pr.
- Dodds, E. R., 1963, *The Greeks and the Irrational*, Univ. of California Pr.
- 遠藤知巳、1997、「手紙の変容・〈声〉の誕生：書簡体空間と『フランケンシュタイン』」、『ミハイル・バフチンの時空』、せりか書房。
- 1999a、「文芸テキストは社会学に何をもたらすか?」、大澤真幸編『社会学の知33』、新書館（近刊）。
- 1999b、「^{ディスコース}『言説』の経験論的起源」、『思想』掲載予定。
- Evelyn, John, 1697, *Numismata: A Discourse of Medals, Antient and Modern*, Benj. Tooke.
- Fudge, Gilbert, & Wiseman (eds.), 1999, *At the Borders of the Human: Beasts, Bodies and Natural Philosophy in the Early Modern Period*, Macmillan.
- Gaukroger, Stephen (ed.), 1998, *The Soft Underbelly of Reason: The Passions in the Seventeenth Century*, Routledge.
- Hillman, David & Mazzio, Carla (eds.), 1997, *The Body in Parts: Fantasy of Corporeality in Early Modern Europe*, Routledge.
- Hirschman, Albert O., 1977, *The Passions and the Interests*, Princeton Univ. Pr.=1985、佐々木毅・旦祐介訳『情念の政治経済学』、法政大学出版局。
- Hobbes, Thomas, 1650→1994, *The Elements of Law Natural and Politic*, Oxford Classics.
1651→1968, *Leviathan*, Pelican Classics.
- Knowlson, James, 1975, *Universal Language Schemes in England and France*, Univ. of Toronto Pr.=1993、浜口稔訳『英仏普遍言語計画: デカルト、ライプニッツにはじまる』、工作舎。
- Kroll, Richard W., 1991, *The Material World: Literate Culture in the Restoration and Early Eighteenth Century*, Johns Hopkins Univ. Pr.
- Lord Kames (Henry Home), 1762→1993, *Elements of Criticism*, in 2 vols., Thoemmes Pr.
- Lynch, Deidre Shauna, 1998, *The Economy of Character: Novels, Market Culture, and the Business of Inner Meaning*, Univ. of Chicago Pr.
- Patey, Douglas Lane, 1984, *Probability and Literary Form: Philosophic Theory and Literary Practice in the Augustan Age*, Cambridge Univ. Pr.
- Pinch, Adela, 1996, *Strange Fits of Passion: From Hume to Jane Austen*, Stanford Univ. Pr.
- Petronius, *Satyricon*. =1961、岩崎良三訳『サテュリコン』、『世界文学大系64 古典文学集』所収、筑摩書房。
- Reynolds, Edward, (1647)→1996, *A Treatise on the Passions and Faculty of the Soul* (vol. 6 of the Works of Reynolds), Soli Deo Gloria Publications.
- Senault, Jean François, Henry Earl of Monmouth (trans.), 1671, *The Use of Passions*, John Sims.
- Seneca, *De Ira*. =1958, Barose, John W. (trans.), *On Anger*, Seneca Moral Essays I, Loeb Classics.
- Smeed, J. W., 1985, *The Theophrastan 'Character'*, Oxford Univ. Pr.
- Stillman, Robert E., 1995, *The New Philosophy and Universal Languages in Seventeenth-Century England: Bacon, Hobbes, and Wilkins*, Bucknell Univ. Pr.
- Wilson, Thomas, 1560→1940, *The Arte of Rhetorique*, Oxford Univ. Pr.
- Wright, Thomas, 1604→1971, Sloan, Thomas O. (ed.), *The Passions of the Minde in Generall*, Univ. of Illinois Pr.

Passions and the Body: Semiotic Space in Seventeenth-Century Europe

ABSTRACT

It is a shared impression among social historians and humanity researchers that 'passion' was one of the words which register something characteristic of 17th-century modernity. Passions then meant radically different from what they are to us in 20th century, since for us they are defined as a sort of residual margin outside of emotions, whereas for early moderns there was, strictly speaking, no such category as 'emotions.' Discourses of passions in the 17th century seem to indicate a symptom of the revival of a more 'psychologized' idea of passions in antiquity (compared with that of more neutral, omnipotent 'motions' in the Scholastic trend), in which they were conceived as some exterior powers that fall upon a human, and to which the person reacts only 'passively.' This process had vital consequences that led up to a totally new demarcation of the boundary (and the mastery of relationships) between the human subject and the outer world, between what is going on in the human mind and what are out there as objects. From this articulation emerged another conception of passions as signs/characters which are both inscribed in the mind and made legible through their appearance on the body, thus foreshadowing modern semiotic space that was to evolve later on. Taking up comparatively less-known figures in the field of sociology like Reynolds, Senault, Charlton and Bulwer, I sketch out some versions of the discursive treatment of passions in the 17th century, and thereby seek to reconstruct a specifically early modern semiotic space, in which the very figures of the body, characters, and passions are deeply implicated.

Key words: 17th-century modernity, the articulation of the inner/outer world, semiotic space